

北海道医歌人会詠草



渡辺 寛一先生を思う

札幌 古屋 統

教授交替雰圍気荒る、教室にお、らかに個性を謳い給える
酒召して雪中櫓で曳かれ来る曳く先輩にフレーフレー叫ぶ
延髄に届けば起こす呼吸麻痺後頭窩穿刺教え給える
純・豊・善・乱・五・学会旅行の漫遊記医局の五人五氏会と呼ぶ
出張の帰り一夜の歎盡す良く醒めボヤを防ぎ給える

セイヨウサンザシ

札幌 浜島 泉

この道のセイヨウサンザシ定めてぞ今日咲きつらむ 選み来にけり
いつの日に埋みしものか 日が温(ぬる) み芽吹く柑橘色豊なり
春雨に濡るる路上の若枝は 風にて落ちしイタヤカヘデの
雪溪が斑に残る遠き山 風の季過ぎて町にトチ咲く
当方の行く先表示を 前に行くバスのガラスに読むターミナル

虹別原野

釧路 児玉 昌彦

開拓の苦勞を語る百二歳年輪のからだ今も赫灼
妻喪くし大病しても独りなお土地を守った開拓魂
凶作と戦争乗り越えこの土地に一男五女がよくぞ育った
農業を厭い都会に住む子らの世話にはならずと突張ってきたが
老も死も自然の攝理 開拓の努力の跡が原野に還る日

海

旭川 稻積 文子

やるせなく大海原に独り来て 逝きし友等の名をばつぶやく
広き海小っぱけな自分 今米寿 心弱さは盡きることなし
日本海沿岸の海は果てしなく 青々として独りわびしむ
緑深き樹々の間の空間を 静謐に占める深紅の牡丹
ひそやかに何を訴えるか牡丹花 心とらわれ去り難くあり

子ら

江別 三宅 浩次

少子化とマクロの数は語るけれどミクロの数は家庭が造る
子らの声にぎやかになる夏休みこの平和こそ永遠ならむとぞ
野に遊ぶ子らに日差しのまぶしさよ四つ葉探しの昔を想う
わが歳の十分の一の幼き子これから人生十倍以上
平凡に一日過ぎしこの夏も蚊取り線香に火を灯す夜

吉村 誠治 先生を偲んで

精神科講義は前に陣取りて些か目立つ学生なりし
酒の席「大中」二階枯れず、き五十年経てなほ耳に在り
誠ちゃんのおやじさんとは若い頃競り合いましたと地元の古老
併設の看護学院テストにも放射線障害厳しかりと
我が死後に弔歌頂く方と決め順序が逆と夢想だにせず

吉村誠治先生は美唄出身

北大医学部二十八期卒 美唄労災病院に放射線医学科創設

古屋 統